11 月 28 日のメッセージ

聖書：イザヤ書　51：　4－11

「わたしに聞け」

神は私たちに必ず救いをもたらされる(「わたしは瞬く間に／わたしの裁きをすべての人の光として輝かす。」イザヤ書 51:4)。その希望が私たちをして新たな一歩を踏み出させます。そして、その希望に燃えて歩む民を、その時を待ち続けている民を神が見捨てられることはありません。心からの求めを見逃されることもありません(「神よ、立ち上がり、地を裁いてください。あなたはすべての民を嗣業とされるでしょう。」詩編 82:8)。その時が来れば、神の恵みはこれまで以上に与えられ、それは永遠に続きます(「天が煙のように消え、地が衣のように朽ち／地に住む者もまた、ぶよのように死に果てても／わたしの救いはとこしえに続き／わたしの恵みの業が絶えることはない。」イザヤ書 51:6)。だから、その時が来れば、民は喜びの歌を歌いながら、何の不安もなく歩むことができるようになるのです(「主に贖われた人々は帰って来て／喜びの歌をうたいながらシオンに入る。頭にとこしえの喜びをいただき／喜びと楽しみを得／嘆きと悲しみは消え去る。」イザヤ書 51:11)。

しかし、その日、その時がいつ来るのか。それは人間には知らされていません(「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」マルコによる福音書 13:32)。想像したくもないことですが、泥棒は予期しないときに突然やってきます。それと同じように、「その時」は突如やってきます(「盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです。」テサロニケの信徒への手紙一 5:2)。「自分だけは大丈夫」とうそぶいている人こそ気をつけなければなりません。恵みと共にもたらされるという裁きに備えなければなりません。

だから、「その時」に備えて私たちは「目を覚ましていなければならない」(マルコによる福音書 13:33)のです。いつ何時、神が救いを示されるかはわかりません。その恵みを見落とすことのないようにいつも目を覚ましていなければならないのです(「それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。」マルコによる福音書 13:29)。

ただ、どれほど心を強く保ったとしても、人間の力だけで目を覚ましているのはとても難しいものです。「イエスと共にいれば大丈夫」と胸を張っていた弟子たちもイエスから離れたらすぐに眠ってしまいました(「再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。」マルコによる福音書 14:40)。イエスのすぐ近くに居ながら、人間の心は簡単に易きに流れてしまうのです。

しかし、たとえそのように弱い人間であったとしても見捨てない。これが神の約束だったはずです。そのことを示すために神はイエスを十字架につけられました。いつも神が共にいる(=インマヌエル)ことを示すために。いつも神と共に生きる道があることを示すために(「主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。」テサロニケの信徒への手紙一 5:10)。再びイエスが来られることを示すために。

「わたしに聞け」と神は呼びかけられます。その呼びかけに応える私たちの心には希望=神の教えが置かれます(「わたしに聞け／正しさを知り、わたしの教えを心におく民よ。人に嘲られることを恐れるな。ののしられてもおののくな。」イザヤ書 51:7)。この希望こそが私たちの目を覚まさせ、「その時」まで待ち続ける支えとなるのです。